

ランドスケープデザインから自然を評価する

自然の人工化・装置化による時間と空間の尺度を探る

吉村元男（地球ネットワーク会議）

ランドスケープデザインは、自然や大地（ランド）のありようを、見る（スケープ）という視点から「見る人」の視覚体験によって評価し、創作をする行為からなる。この場合、得られた「見た人」の映像は、主観的なものとなり、実際に存在していた「見た人の対象」と「見た人の映像」は異なる。この両者の乖離が、文明の持つ力の源泉である。

文明は自然を抑圧する。しかし、文明は、自然と共にあるという意思を内在させる。「ヒトに文明の圧力がかかればかかるほど、ヒトはく緑という装置化された自然をを求める。」という真理に依拠しているからだ。そのことは、文明、自然、ヒトのトライアングルの関係を浮かび上がらせる。このトライアングルこそ、ランドスケープデザインが登場する磁場である。

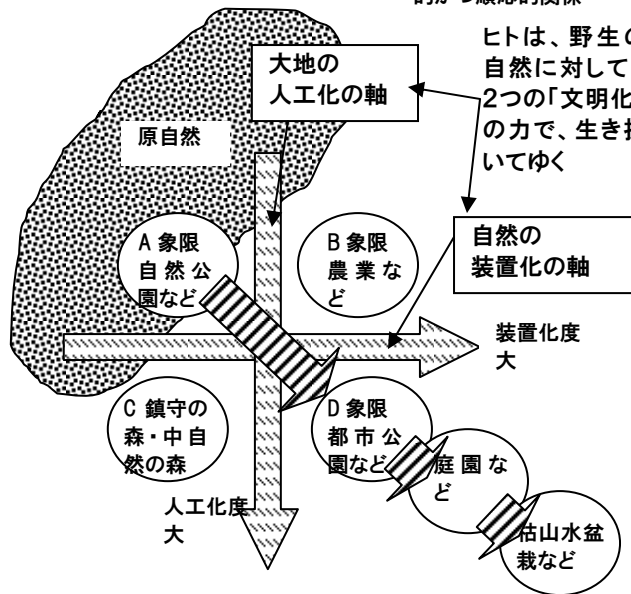
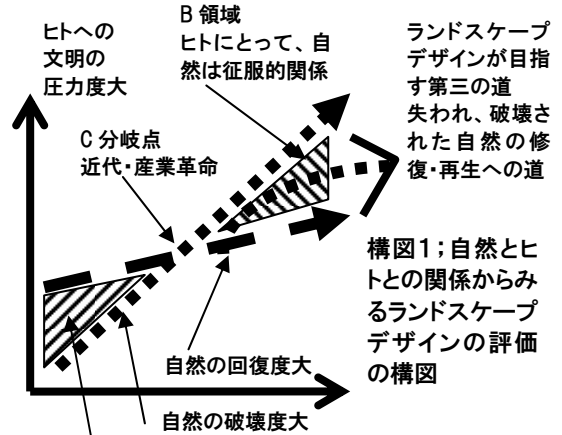
このランドスケープデザインの磁場を、三つの構図から、説明し、その構図のなかで、具体的には、吉村元男の三つの作品（万博記念公園、新梅田シティ、大阪国際会議場）の紹介をします。

参考文献；吉村元男著

「都市は野生でよみがえる」(学芸出版社)

「エコハビタ環境創造の都市」(学芸出版社)

「地域油田一環節都市が開く未来」(鹿島出版会)



構図2；自然の人工化・装置化からみたランドスケープデザインの構図

大地の人工化軸；緑の被覆度・自然度

自然の装置化度；自然のシステム化度

A象限

B象限

C象限

D象限

文明化する自然の力
抽象化
=コモン
共有される自然と精神性

